

## 第 79 年会女性技術者フォーラム

■日 時 2014 年 3 月 19 日 (水) 9:15~13:00

■会 場 岐阜大学工学部 I 100 番教室

■ご講演者

1. 野村淳子 (東工大准教授) 特徴的な構造を持った無機多孔体物質
2. 所千晴 (早大准教授) 鉱山廃水処理の効率化を目指した有害無機陰イオンの水酸化物共沈機構の解明
3. 北川尚美 (東北大准教授) バイオディーゼル燃料製造に関する実用化技術開発
4. 大坂典子 (東京ガス) バイオマス利用技術の開発
5. 辻佳子 (東大准教授) 環境負荷低減を目指した機能性薄膜材料のナノ~ミクロな構制制御
6. 上野裕美 (綜研化学) 仕事と私
7. 上新原十和 (サントリービジネスエキスパート) 分析化学との出会いから~全ての経験を今に繋げる~
8. 松井真一 (岐阜大学特任助教) 岐阜大学男女共同参画の取組報告

■内容

男女共同参画委員会の藤岡委員長より、先ず始めに「女性技術者フォーラム」開催の目的を、若い女性技術者に現在活躍されている女性研究者の研究成果の講演を聞いていただき、将来の自分に対するイメージ作りに役立ててもらふこと、と説明された。次に東工大 野村淳子先生、早大 所千晴先生、東北大 北川尚美先生、東京ガス 大坂典子氏、東大 辻佳子先生にご講演していただき、その後、女性賞受賞者の綜研化学 上野裕美氏、サントリービジネスエキスパート 上新原十和氏に受賞記念のご講演をしていただきました。ご講演は 30~40 名の聴衆の参加を得て行われ、全てのご講演後に藤岡委員長により講演総括が行なわれ、その後パネルディスカッションに移りました。パネルディスカッションでは、先ず岐阜大学の男女共同参画推進室 松井真一先生より、岐阜大学での男女共同参画の取組が報告され、それを受けて、松井先生を始め、北川先生、所先生、上野氏、上新原氏及び聴衆による意見交換を藤岡委員長の司会により行いました。

野村先生のご講演では、特徴的な構造を持った無機多孔質物体としてのメソポーラス遷移金属酸化物に関して紹介された。高い規則性と表面積を併せ持つため、触媒としてのみならず、さまざまな材料として期待されている。例としてメソポーラス酸化タンタルによる水の光分解触媒機能や応用例として水槽の汚れ分解材として開発していることが報告された。



野村淳子氏



所千晴氏

所先生のご講演では、休廃止鉱山からの廃水処理を念頭に、汚泥の減容化を目指した水酸化物共沈機構の解明に関して紹介された。会場からは、福島原発からの放射能汚染に関連してセシウム除去に役立てられるのではないかと、との質問がなされ、所先生ご自身は実験されていないが、文献からは有効と考えられると回答されていた。



北川尚美氏



大坂典子氏

北川先生のご講演では、バイオディーゼル燃料製造に関する実用化技術開発に関して紹介された。陰イオン交換樹脂がバイオディーゼル合成触媒として高い活性を有することを見出したことから、遊離脂肪酸を含むどんな油からでも簡単かつ安定的に高品質燃料の製造が可能であり、さらに脂肪酸油に含まれるビタミン E の回収を可能とすることにより、総合的に採算性の良いプロセスの開発を進めている。

大坂氏のご講演では、バイオマス利用技術の開発に関して紹介され、例として東京ガスにて開発をおこなったバイオマス関連の都市ごみ利用乾式メタン発酵ガス化システム、下水汚泥熱分解ガス化発電システム、生ごみ利用アルコール・メタン 2 段発酵システム等の開発経緯、プロセス紹介の報告がなされた。ただし、費用の点から事業化が難しいプロセス

が多いことの説明がなされた。尚、企業における研究は、ニーズに起因するものが多いこと、様々な専門性を持った人が協力すること、必要な時、必要な場所に人を集めることが需要であることが紹介された。最後に、若手研究者に向けて、どんな知識も役に立つことがあるので、広く興味を持って取り組んでほしいとのアドバイスがなされた。



辻佳子氏

辻先生のご講演では、環境負荷低減を目指した機能性薄膜材料のナノ～マイクロな構制制御が紹介された。環境負荷低減を目指した電子・情報デバイスやエネルギーデバイスに用いる機能性薄膜材料の構造制御の観点から、ドライ/ウエットプロセスによる無機/有機薄膜に関する研究について、基礎と応用の両面から紹介された。どのようなプロセスを選択するにしても、プロセスの環境負荷低減を図りつつ、いかに材料の特性を生かしていくかという視点が重要であるとコメントされた。

女性賞受賞記念講演として上野氏のご講演では、「仕事と私」と題して、自己紹介と会社紹介がなされた後、携わった無溶剤アクリル粘着テープの開発に関するお話しが紹介された。会社での業務において、大学で専攻していた化学工学の知識は非常に役立っており、問題解決においては、現状を良く観察して対応することが大事とコメントされた。ワークライフバランスについて、「自立した人生を送りたい」、「仕事も家庭も大切にしたい」、「キャリアアップも大事」と述べられ、米国のドナルド・E・スーパーが提唱した「ライフキャリア・レインボー」についての紹介がなされた。



上野裕美氏



上新原十和氏

同じく女性賞を受賞された上新原氏のご講演では、「分析化学との出会いから～全ての経験を今に繋げる～」と題して、自己紹介、業務経歴、ご自分にとってのワークライフバランスの実態をお話いただき、ワークライフバランスについて、次のご感想をご紹介頂きました。①会社人生は長いので、長いスパンで考える。②「両立」と肩肘はらずに「どっちもやっているだけ」と考える。③上司、同僚、夫、両親、友達等への感謝、恩返しの気持ちを持つ。④自分の経験は「情報の一つ」であり、価値観は人それぞれであることを認識する。また、将来について、周囲の女性社員が昇進へのモチベーションを持てるような働き方を示し、キャリアの可能性をともに描いていきたいとの希望を述べられた。尚、上新原氏は前日の女性賞授賞式に参加できなかったため、ご講演前に藤岡委員長より賞状及び記念品が授与されました。

講演終了後に、藤岡委員長により各ご講演の纏めを聴衆の皆様に述べられ、その後、藤岡委員長の司会により、先ず、松井先生に岐阜大学における男女共同参画の取組の紹介がなされ、そのなかで岐阜大学における研究補助員の派遣などの女性研究者への支援内容、及び女性教員の人数に関する数値目標の導入とその成果について、報告がなされた。



松井真一氏



パネルディスカッション

松井先生のご報告を受けて開始されたパネルディスカッションでは、壇上に残られた北川先生より、大学における女性研究者支援には長期的なケアが必要であること、所先生より、大学では優先的に女性研究者を採用するシステムにはなっていない、人により価値感がバラバラなので、柔軟性のある、多様性のある支援が必要とのコメントがなされました。また、上新原氏より、障害などいろいろな問題がある人が働きやすい環境、制度を目指している。そのなかで女性にとって働きやすい環境、制度を目指しているが、女性優先への意識変革の仕組みがないこと、さらに30歳代までは、学校で家庭科などにて学んできているので男性も進んだ意識を持っているが、企業上層部も含め、年齢が高い人は意識が変わっておらず、絶えず働きかけをしていかないと意識が変わっていかないと、とのコメントはなされました。会場からは、岐阜大学男女共同参画推進室長の林正子副学長より、柔軟性が大切であり、各講演者のような女性研究者がしなやかに柔軟に生きていることを女生徒にぜひ知ってほしい、先ず、実態を企業も含めた皆で共有して、困っている人達へ柔軟に支援していかねばならない、との発言がなされました。野村先生からも、支援のアナウンスが行き届いていない。周知するシステムを考えなければならないとのコメントがなされ、実態の共有、柔軟な支援、支援の周知システムの構築などが大切であると、認識を一致させてディスカッションを終了致しました。